アーチルニュース　ちぇなっぷ

発行元：仙台市発達相談支援センター　〒981-3133 住所 仙台市泉区泉中央２丁目 24－1
TEL：022-375-0110 Fax:022-375-0142　e-mail:archl@luck.ocn.ne.jp
http://www.city.sendai.jp/kenkou/hattatsu/gaiyou

誰もが当たり前に暮らせる地域の取り組み

「ノーマライゼーション」がデンマークのバンク・ミケルセンにより提唱されて約半世紀。自らもナチの強制収容所に収容された体験を持つミケルセンは、戦後社会省の行政官となり、「ノーマライゼーション」という言葉と考え方を提唱するとともに、その理念を福祉政策に反映させた人として知られています。「ノーマライゼーション」の目的は、障害のある人ひとり一人の人権を認め、彼らを取り巻く環境を変えることによって参加と活動を保障し、彼らが自らの生活を選択する際に障害のない人の生活と可能なかぎり同じようにしていくことのできる「共に生きる社会」を実現しようとするものです。この考えは、1981 年の国際障害者年の「完全参加と平等」で世界に広まり、2001 年のＩＣＦ（国際障害分類改訂版：国際生活機能分類）においても引き継がれ、本市の障害者保健福祉計画の理念にも掲げています。

「ノーマライゼーション」は、障害そのものを軽減して「正常」に近づけようとする取り組みではなく、社会生活を共に送ることを可能とするための条件整備が中心課題となっています。

アーチルでも、発達障害のある本人と家族が生涯にわたって地域で当たり前に暮らすことができるようになるためには、福祉サービスの充実はもとより、家庭や地域で係わる人々の“障害に対する態度”が変わるとともに、日常生活場面の関係性の中でひとり一人の人権が認められ、彼らを取り巻いている環境を共に変えていく「地域づくり」が重要と考えてきました。

今回の“ちぇなっぷ”では、本人・保護者・保育所・学校・地域の人々が参加した“当たり前の暮らしを支える地域の取り組み”を紹介しています。一人の願いを実現するケア会議から発展した地域の動きは、ケアマネジメントという手法を活用し、参加を起点として個人や組織、地域が主体者となり、自らがもてる力を発揮しながら生活上の課題を解決していくというエンパワメントの過程そのものでありました。

アーチルでは，これからもこうした地域の取り組みに共に参加し、実践的に学んだことを発信していきたいと考えています。

所　長　今田　愛子

※ちぇなっぷは「CHIN UP・前を向いて」の意味です。

本人とその家族が
安心して生活できる地域

誰もが主役となる地域をめざして

アーチルでは，平成 17 年度から，厚生労働省補助事業「圏域支援体制整備事業」において，特別支援教育との連携及び地域での一貫した支援ネットワークづくりに取り組んできました。今回は，アーチルと袋原小学校に入学した二人の子どもたちとその保護者たちとの出会いをスタートに，学校や地域の人たちがつながり協力して，「誰もが当たり前に暮らすことのできる地域」をめざした取り組みを紹介しながら，「乳幼児から成人までの一貫した支援システム」を地域に創りあげていくための大切な視点について考えてみました。

その１　知る･出会う（保育園から小学校へ）

「これまで得てきた良い関わりを学校でも継続して欲しい。でも，小学校に子どもの何を伝えたらいいのだろうか…」。入学を前にした二人のお母さんのこのような疑問が始まりでした。

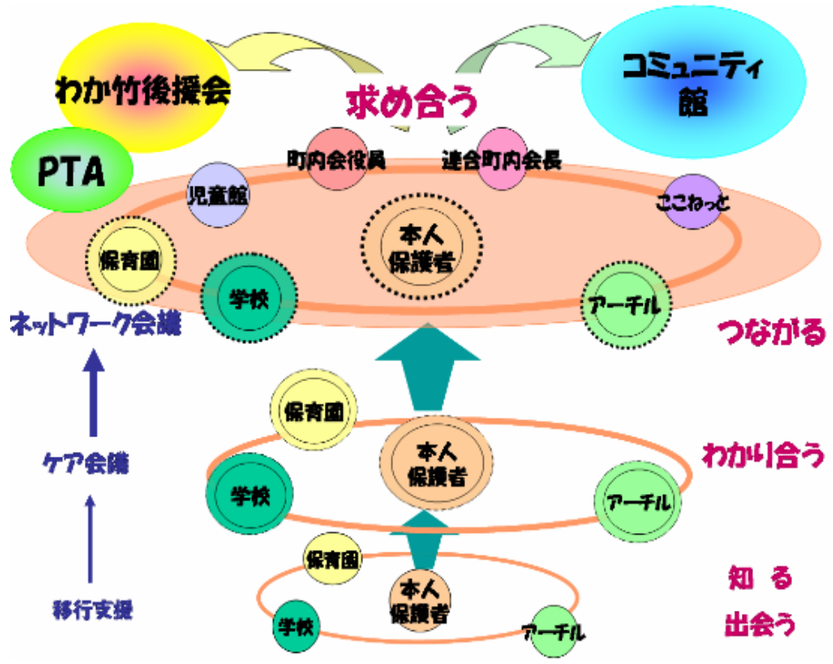
この思いを学校に伝えるために，お母さん，保育園，学校，アーチルで話し合いを行いました。お母さんたちは，これまでの子育ての思いや「この子なりに，地域の中で，あたりまえに暮らしていけるようになってほしい」という願いを語ってくれました。校長先生や保育園の園長先生からは，「分かりました。学校は，こどもの将来や生活に目を向けていきます」，「心配しなくてもいい，この子たちは地域が支えていく」という言葉が聞かれ，話し合いに参加した全員が，お母さんの願いを知りあう場となりました。

その２　分かり合う（地域でより楽しく過ごしたい）

夏休み明けに，再びお母さん，保育園，学校，アーチルが集まりました。学校が子どもたちの特徴に応じた関わりを入学直後から始めてくれたので，学校生活はおおむね順調に過ごせていることが皆で確認できました。

しかし，夏休みも毎日通えた保育園の頃と違って，「今年の夏休みは過ごす場がなく親も子も大変でした。子どものことを分かってくれる友だちと交流できる場が欲しい。家庭や学校以外でも子どもや親が安心して過ごせる場が欲しい」という新たな願いが語られました。

校長先生は，「このような願いは誰にでもあること。自分の町を何とかしたいと思っている地域の人たちに分かってもらいたい」と考え，地域で様々な活動をしている人たちとの話し合いの機会を設けることにしました。



その３　つながる（地域の人との新たな出会い）

学校が呼びかけ役となって，児童館長，連合町内会長，町内会役員，地域生活支援事業所などを交えた会議を開きました。お母さんたちは，再び「安心して過ごせる場」への思いを伝えました。お母さんたちの話を聞いた地域の人たちは，「このように本人や家族から発信してもらわないと私たちは分からない。どんどん発信して欲しい。学校からも地域に向けて発信して欲しい。私たちにできることもある。」と応えてくれました。

この話し合いを通して，「この願いは，多くの障害を持った子どもたちに共通すること。彼らを支援することが地域全体を変えることにつながるのではないか。何かできることはないか。地域全体で考えよう。」ということになり，地域の人々や学校が主体的に自分たちにできる支援について考え始めました。

その４　求め合う（新たな資源の創出）

この話し合いを契機に，学区内に建設が予定されていたコミュニティ児童館の開設に向けた運営委員会にアーチルも加えていただき，二人のお母さんたちの願いを伝えました。こうして，平成 19 年４月，小学校の敷地内に障害を持った子どもたちも放課後や長期休暇中に安心して過ごせる新たな場が誕生しました。

また，地域の人たちの発達障害への理解を深めることを目的として「わか竹後援会」（※）が毎年開催してきた「わか竹講演会」の当番校となった袋原小学校の PTA の人たちは，「発達障害児の気持ちにせまる」と題した寸劇とセッションを開催し，これからも，誰もが住みやすい地域をめざして，みんなで活動を続けて行こうというメッセージを地域の人たちへ送りました。

今回の取り組みは，二人のお母さんの願いから始まりました。この願いを実現しようとするネットワークが広がり，障害を持った子どもたちが放課後や長期休暇中にも過ごせる場という新たな社会資源ができていった背景には，本人・保護者の願いを受けとめて一緒に何ができるか考えようとした人たちが地域のなかにいたということがあげられます。そして，自分だけではできないことがあった時に，できる人を求めていったことにより，新たなネットワークができあがりました。さらに，本人・保護者が暮らす地域の人たちが「自分たちの地域の課題」として主体的に取り組みを展開したことや地域の人たちを含めた支援者同士がともに考え活動することでネットワークが強くなっていきました。

どんな小さな願いでもそれをきちんと受けとめ伝えるために発信すること，何が必要か一緒に考えること，一緒に考える人を増やしてネットワークを広げていくことが，だれもが当たり前に暮らすことのできる地域を創っていくことにつながるのではないかと考えます。

※「わか竹後援会」
障害のある子もない子も，みんな一緒に地域のなかで育って欲しいという思いから，中田小を中心とした，中田地区内の４小学校，２中学校の PTA の人たちが創りました。

かけはし

「アーチル」とは「アーチ（arch：橋）」と「パル（pal：仲間）」とをかけたもので，センターが障害者と市民の「架け橋」になるようにとの願いを込め，市民公募によってつけていただいた愛称です。このコーナー「かけはし」は，読者の皆さんとアーチルが双方向で情報交換できるよう，皆さんや職員からのメッセージなどを掲載していきたいと思います。

平成19年度　第1回療育セミナーを開催しました

「発達障害児者の生活支援のあり方を考える　～誰もがあたりまえに暮らす地域社会を目指して～」をテーマとして，今年度第１回目の療育セミナーを７月22日に開催しました。最初に，明治学院大学社会学部教授の中野敏子さんから，「一緒につくる支援，地域に広がる支援」と題して講演いただきました。「障害のある人にとって，地域ってわざわざ言わなければならないのはなぜ？どんな人にとっても，地域に自分がいることがわかる社会をみんなで作っていくことが必要！」とメッセージがありました。次に，「同じ地域の住民として」をテーマにして二つの活動報告をしました。障害児の余暇や休日の過ごしかたとして，様々な地域の人たちと関わりながら活動している様子を映像も交えながら報告してもらいました。本人もボランティアさんも皆，とびきりの笑顔で楽しんでいる様子が感じられました。

関わっている子どもに，近所のコンビニで声をかけられて，うれしかった。

参加者からの声･･･

若いうちからこういった活動に参加することで，障害者への理解がより深まり，関わりあって暮らすことがあたりまえの社会になっていくのではないかと思う。

今まさに地域を見直す時！「誰もが大切な存在」ということについて，頭でっかちにではなく，わかりやすいメッセージをうけた。

遠い地域の報告ではなく，今この地域のことで，これからの子育ての勇気が得られた。

「医療的ケアを必要とする重症心身障害(児)者の地域生活支援のあり方」についてまとめました！

平成 17 年度から，仙台市における医療的ケアを必要とする重症心身障害児(者)と家族の現状と課題を整理し，重症心身障害児(者)と家族が地域で安心して暮らしていくことができる仕組みのあり方について家族，施設職員，学識経験者等で検討してきました。

報告書では，これまでの相談等からあげられた課題を基に，重症心身障害児(者)通園事業・障害者福祉センター・レスパイトサービス・ショートステイ等既存施策の拡充とともに，小規模多機能施設の創出等新たな施策の必要性を述べています。また，あり方検討会とアーチルの役割として普及啓発・情報提供・ネットワーク形成などをあげ，具体的な活動に取り組んでいく予定です。この報告書の内容は，仙台市障害者保健福祉計画（平成 19 年 3 月）の第 3 章基本方針１－（主要施策１）に反映されています。

第三回アーチル療育セミナー　(ご案内)

「誰もが地域の一員として
～共生社会を目指す居場所づくり～(仮)」

日時：平成２０年１月１２日(土) 13 時 30 分～17 時
場所：仙台市役所８階ホール
講師：津田　英二氏（神戸大学大学院総合人間科学研究科）
知的障害のあるご本人・保護者等

編集後記：袋原の取り組みは、障害のある人が地域で当たり前の生活をするための支援が、地域の人々の出会いのきっかけになり、お互いのことを理解し合い、つながりができ、地域づくりに結びついたとも言えます。

防犯・防災・子育て・介護等のあらゆる分野で地域づくりの必要性が叫ばれています。だれもが当たり前に暮らすことのできる地域を目指して人々が力を合わせてつながっていくことが、地域づくりのヒントであることを示していると思われます。(後藤)